

ルソーの読み方、読まれ方

小林 善彦

フランス文学の作家のなかで、後世にもっとも大きな影響を与えた人を数人挙げるとすれば、疑いもなくルソーはそのなかに入るであろう。またルソーは生前から現在にいたるまで、一方では親しまれ、尊敬され、ときには「聖人」「賢者」と呼ばれて教祖のように崇拜されながら、他方では嫌われ、批判され、「狂人」とののしられている。このように大きな影響を与えながらも、評価が極端に分かれるのは、ルソーの作品が読者に強い印象を与えると同時に、読まれ方が各人各様さまざまだからではないかと思われる。もうひとつ、彼の活動範囲が広がったことも、多様な読まれ方をした原因であろう。ルソーの著作を見ると、その扱った主題は政治、文明批評、小説、詩、教育、自伝、音楽などにおよび、その読解も影響も多様にならざるをえない。まさに「近代の入口にはいたるところにルソーがいる」(ランソン)のである。

このような事情をふまえて、ルソーがフランスと日本でどう読まれてきたかの、概略をたどってみたい。それはわれわれがルソーをどう読むかの参考になると思うからである。ただし私は「ルソーをどう読むべきか」とか

「正しい読み方」などを示す気はまったくない。というのは、ルソーのように多面的な人間の著作は、さまざまな解釈が可能であり、極端な事実誤認が故意に曲げて読んだ場合を除けば、誤読もまたひとつの解釈となりうるし、とくに多くの人がそう読んだときには、ひとつの読解として認めた方がよいと思うからである。影響についても似たようなことがいえる。ルソーの著作を読んで、直接的、実質的に影響を受けた人もいるが、読まない人でも影響を受けることはありうるし、「ルソー神話」というような漠然とした影響もありうる。

*

*

*

さて、フランスにおけるルソーの影響を、ごく概略的に見ていくと、ルソーは生前から「感じやすい魂」の人、古典主義時代の理性的人間像とはまったく異なった新しい人間像の人として、広く敬愛されていた。主として『新エロイズ』の影響と思われるが、このベストセラーの小説によってルソーは、文学者というだけではなく「人生の師」となり、彼のもとには読者からの人生相談の手紙が殺到する。それほど読者の共感が強かったのである。ルソーの死後も彼が埋葬された土地への「エルムノンヴィル詣で」は続く。

フランス革命の時代になると、ルソーは『社会契約論』の著者、政治思想家になる。すなわち、革命派の各党はルソー主義の名のもとに行動するようになるが、彼らがどこまで『社会契約論』を読み、理解していたかは分からない。しかし、『社会契約論』の内容を説明したパンフレットのようなものが、フランス全国に広まっていたらしいから、一種の大衆的な伝播 diffusion populaire の形としてのルソーの影響といってもよいであろう。革

命は「ルソーのせいだ、ヴォルテールのせいだ」と歌うガヴロシュ少年（『レ・ミゼラブル』）はその結果である。しかし、革命がなにもかもルソーの影響のもとに行なわれたという主張に反発したのか、革命家の演説をはじめとする言動をひとつひとつ調べて、それらがルソーの思想とは無関係であることを証明しようとした風変わりな研究もある^{（一）}。だがこの証明はやはり無理であり、一七八九年の『人権宣言』や一七九三年のいわゆるジャコバン憲法は、明瞭にルソーの政治思想の影響のもとに書かれている。

その後十九世紀の間、フランスの政治は帝政、王政、共和制とつぎつぎに変わり、そのたびにルソーに対する評価も変化するが、二百年経ったいま、現行のフランス憲法の前文には、「一七八九年の宣言によって定義されたような人権および国民主権の原則への愛着を厳粛に宣言する」と記されているのだから、ルソーの思想はフランス共和国の基礎をなす思想として、取り入れられているといえるであろう。

十九世紀のロマン主義の時代になると、ルソーはふたたび感性の解放の人、古典主義的な理性的人間観を打ち破る人として評価される。人間が人間であるあかしは理性にあるのではなく、感情の高揚のうちに幸福を感じることにあると考えるロマン主義者は、自分たちの先駆者をルソーのなかに発見する。またルソーの作品のなかに現われる美しい自然描写、叙情的感動は、詩人たちの模範となる。このロマン的なルソー読解は、革命的思想家ルソーと並んでその影響はドイツ、英国をはじめヨーロッパ全体に及んで長く続き、現在もまだ続いたといえる。

第三共和制の時代になると、ルソーを近代デモクラシーの思想家としてとらえる読み方が出てくる。その代表的な人はギュスターヴ・ランソンである。彼はその『フランス文学史』のルソーの章で、きわめて明快な公式の

形で、ルソーの思想を表現する。すなわち、自然は人間を善良につくつたが、社会がそれを邪惡にした。自然は人間を自由につくつたが、社会がそれを奴隷にした。自然は人間を幸福につくつたが、社会がそれを悲惨にした。」ランソンはこの公式にもとづいてルソーを読み、従来ルソーのさまざまな作品の間には矛盾があるといわれていたのに対して、ルソーの作品のなかに統一を求めようとした。このランソンの読解はどちらかといえば合理的、実証的でアカデミックな読み方で、その後もソルボンヌで継承されて、たとえばダニエル・モルネや第二次大戦後のドラテの研究はそれをさらに緻密なものにしている（²⁹）。

アカデミックなルソー読解に転機をもたらしたのは、六八年の五月革命であつた。学生たちが好んでとなえたスローガン「想像力に権力を与えよ」が示すように、伝統的な合理主義的な思考よりも、感性の解放を主張する潮流に乗つて、ルソーを見る視線も変わつてきた。すなわち、合理的なハーマニーの技術を重視する音楽よりも、心に訴えるメロデーこそは真の音楽だとするルソーの音楽論、『言語起源論』が再評価された。二百年の間、研究者たちからさえもほとんどかえりみられなかつたこの短い論文によれば、人間の最初の言語は感情から発した叫び声であつたのだが、文法が完成し、理性的な言語となることによって墮落したのだという。このルソーの論法に六八年の学生が共感するところがあつたようで、その後のフランス現代思想の著作では、しばしば伝統的なデカルトの合理主義への批判が繰り返されてきた。しかしながら、今日でもバカロレアにおける哲学の論文試験では、問題を三つに分けて論じているのだから、フランス人はやはりデカルトの子孫ではないかと思われる。

もうひとつ、高度工業国家がかかえる問題から、ルソーを新たに評価する読み方が起こつてきている。すなわち生産力が発展し、生活が豊かになれば、人間は知識と理性によつて無知と偏見を打ち破り、幸せになれるとい

う十八世紀啓蒙思想のオプティミズム（その代表はヴォルテール）に対して、物質的な生活が豊かになった人間は、はたして幸福になったであろうかとルソーは問いかけている。むしろ豊かな生活を維持するために人間は自然を破壊し、不平等を進め、不健康になっていないだろうか。このルソーの問題提起は、現代に通じるところがある。考えてみれば十八世紀のフランスは、農業と手工業の技術革新の時代であった。この時代のあたらしい技術を紹介したのは、デイドロの編集した『百科全書』である。とりわけ、十七巻の本文のほかに十一巻の図版を出版したことがそれを証明している。新しい機械や道具は文章では説明できないが、図版を使えば容易に理解できる。『百科全書』に十一巻もの図版をつけたということ自体、この時代が技術革新の時代であったことを示している。日に日に生産方法が改善されて、人びとがその結果を享受しつつあったときに、「それで幸福になれるのか」という根源的な問いを出したのがルソーであった。こう考えてみれば、ルソーはきわめて現代的な問題を投げかけた思想家として再評価されても、少しも不思議ではない。

*

*

*

日本にいつルソーの名前が知られたのかよく分らないが、加藤弘之の『立憲政体略』（慶応四年）のなかに、モンテスキュー、ロック、カントなどと並んでルソー（蘆騷）の名が見える⁽³⁾。また『明六雑誌』第三号（明治七年）にも、「ルウソウ氏」についての言及が見られる⁽⁴⁾。しかし、日本にルソーを紹介した人といえは、「東洋のルソー」といわれた中江兆民である。彼はパリ・コンミュン直後のフランスに留学し、明治七年に帰国す

ると、麹町六番町に仏字塾を開き、政治、法律、歴史、哲学などを教授した。当時この塾で学んだ者は全部で二千人に及んだといわれている。とりわけ兆民はルソーの『社会契約論』を講義し、その訳は写本されて流布していたが、明治十五年には『民約訳解』と題して出版された。内容は第一編と第二編の六章までである。『社会契約論』の翻訳としては、服部徳訳の『民約論』が明治十年に、また原田僭の『民約論覆義』が明治十六年に出ており、すべて漢文訳である。しかし兆民の訳と比較すれば、ルソー思想の理解では兆民の方がはるかに深く、漢文の文章も兆民が断然優れている。兆民の翻訳は訳者の原著に対する深い理解はもとよりであるが、同時にいかにすぐれた思想でも、訳文が立派でなければたいした影響を与えることはできず、兆民の文才によってはじめ大きな影響を与えることができたという事実によって、翻訳のひとつの問題を示しているように思われる。

しかし、兆民の翻訳にも問題があった。それは日本にそれまで存在しなかった概念、たとえば「市民」「主権者」などをどう訳すかであった。ルソーの思想を現在の研究者に優るとも劣らないほど見事に理解していた兆民は、なによりも当時の日本人に『社会契約論』を理解させようとして、全体の意味をとりながら訳文を作り、当時存在していなかった概念には、儒教の用語を用いた。その方が読者には分かり易いと考えたのであろう。たとえば「市民」を「士大夫」または「士」と訳し、「主権者」は「君」、「自然」は「天」または「天理」であった。しかしながら、人民主権を説くこのルソーの著作において、主権者が君になっては辻褄が合わなくなってしまう。兆民が翻訳を途中でやめたのは、そのためであらうと推測されている。それでも『民約訳解』は自由民権運動時代の政治青年たちによく読まれ、運動のためには第二編第六章まで、つまり人民主権、直接民主制の理論で十分であった。

兆民の『民約訳解』は自由民権運動を通じて、日本の思想に大きな影響を及ぼした。ところが兆民はルソーの他の作品、たとえば『告白』、『エミール』、『新エロイズ』などは素通りしてしまった。彼の著作を読むと、他の作品も読んでいたことは明らかなのであるが⁽⁵⁾、それほど興味を持たなかったようである。なぜだろうか。おそらく彼には、封建思想からの解放、近代的な政治制度の確立などへの関心はあっても、感情の高揚や自我の解放は実際の問題とはならなかったのであろうと思われる。儒学の素養が深かった兆民にとって、「修身齊家治國平天下」の心が関心事だったのである。結論としていえば、ルソーはまず『社会契約論』の著者としてのみ、わが国に知られたのであった。

ところで、ルソーの急進主義的な政治思想はわが国に紹介されると、それに対する攻撃もすぐに現われた。明治十五年、東京大学総理加藤弘之は、『人權新説』でつぎのようにルソーを攻撃した。

「古今未曾有の妄想論者トハ誰ゾ。即彼有名ナル蘆騷氏ハ人是ナリ。此人天性慷慨激烈ニシテ、偶仏国王権勢極盛ノ世ニ出テ、其壇制抑圧ニ遇テ憤懣ノ情ニ堪ヘス、為メニ着実ニ事理ヲ研究スル能ハス、遂ニ己レカ妄想ニ誤ラレテ彼著名ナル民約論ヲ著シ……」

加藤はこのようにルソーを批判し、人間が自由自治平等均一ノ権利ヲ固有セリトナセル天賦人權主義ノ如キは、現実には合わないといっている⁽⁶⁾。つまりルソーの思想は、紹介されるとほとんど同時に、危険な思想にされたのであった。

フランス革命からちょうど百年目の明治二十二年、日本では帝国憲法が發布され、議会開催、教育勅語と出来事が続いたあと、言論からは「自由」という語が消えていき、民権思想は民族主義思想に押されていく。そして

民権思想の後継者は幸徳秋水らの初期の社会主義者となる。かくしてルソーの政治思想は今後、社会主義のなかに溶け込んで永く野党の思想となった。

*

*

*

政治思想家としてのルソーが影響力を失っていくその年、まさに明治二十三年に、『告白』が『懺悔録』という題で、森鷗外によつて抄訳され、さらに十年後の明治三十三年になると、石川戯庵訳と生田長江訳の二種類の全訳が出版された。そしてこれからルソーは『告白』の作者として、政治にはまったく無関係な人間として、近代日本文学に大きな影響を及ぼすのである。ルソーから影響を受けた日本の作家は、島崎藤村、國木田独步、田山花袋をはじめとして、ひじょうに数が多く、影響もまた複雑なので、ここでそのすべてを述べることはできないが、そのなかから島崎藤村の例だけを取り上げてみよう。

藤村は明治二十七年、二十三歳の時に『告白』を英訳で読み、深い感銘を受けた。そのときの感動を彼は十五年後に、「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」と題して書いている。それによれば藤村はこの本を読んでいくうちに「今迄意識せずに居た自分といふものを引出されるやうな気がした」という。さらに「真に束縛を離れてこの『生』ライフを視ようとするその精神」を忘れることはできないといっている。

「私がルウソオに就て面白く思ふことは、文学者とか、哲学者とか、あるひは教育家とかの専門家を以て自ら任じなかったところにある。唯『人』として進んで行った処にある。あの一生煩悶を続けた処にある：彼の『懺

悔』は矢張り吾々と同じやうに、失望もすれば落胆もする弱い人間の一生の記録だ⁽¹⁾」
三年間のフランス滞在から帰国した藤村は、やがて『新生』を書くが、そこには『告白』の影響と思われる文章が見出だされる。

「かりに人生の審判があつて、自分もまた一被告として立たされるといふ場合に当り、いかなる心理を盾として自分のなかに起つてきたことを言いつくすことができるか。」（第一巻、九七章）

「もし嘘でかためた自分の生活を根本から覆えし、暗い所にある自分の苦しい心を明るみへ持ち出して、良い事も悪い事もなにもかも公衆の前に白状して、これが自分だ、捨吉だということができたら。」（第一巻、九二章）
これを『告白』第一巻のはじめの文章と比較してみよう。

「最後の審判のラッパがいつ鳴つてもかまわない。私は手にこの書物を持つて、最高の審判者の前に出ていこう。私は声高くこう言つだろう。これが私のやったことです。考えたことです。かつての私の姿です。私は善も悪も同じように率直に語りました。」

かくしてルソーは『告白』の作者、人間解放の作家、「自由に考え、自由に書き、自由に行なふ」人として、明治、大正の作家たちによく読まれ、影響を与えたのであるが、『社会契約論』はほとんど忘れられてしまった。あるいはより正確にいえば、ルソーの政治思想の内容を主張すること自体が、違法行為となっていたのである。

*

*

*

いわゆる大正デモクラシーから昭和初年にかけて、自由教育運動の時代になると、ルソーは『エミール』の著者として知られ、影響をおよぼすようになる。ただしこんどは、『エミール』からの直接の影響というよりは、それを通してペスタロッチ、フレーベルからの影響といった方が正しいであろう。『エミール』はすでに明治時代から、抄訳の形で紹介されていたが、大正二年（一九一三）になると三浦関造の訳が出版され、十年間に五十五版を重ねた。途中から小型版になったとはいえ、八百ページを超える分厚い本で、大正十二年の定価は二円三十銭とあるから、当時の物価から考えればかなり高いのに、よく売れたというべきであろう。『エミール』の翻訳はそのほかにも内山賢次が大正十一年（一九九二）に、平林初之輔訳が二年後の大正十三年に出ている。とりわけ平林訳は、昭和二年に岩波文庫が刊行されると、最初の文庫本の一冊になって、ほぼ毎年版を重ねるほど広く読まれた。

さて自由教育運動を一言でいうならば、「知は力なり」に対する批判であるといえよう。すなわち、子供の天性、個性を重んじて、自発活動を主とし、人間的な完成をめざす教育の主張である。この考え方はわが国では、比較的容易に受け入れられる素地があったと私は思う。というのは、中江兆民の場合でも見たように、江戸時代以来の伝統的な学問であった儒学においては、学問の目的は知のみではなくて、「修身」つまり徳を養うことを重視していたからである。一方、みづから「ジュネーヴ市民」、つまりジュネーヴ共和国の主権者の一員であることを誇りに思っていたルソーの学問観もまた、知に徳を結びつけた点に特長があった。というわけで、『エミール』はわが国に紹介されるやいなや、たちまちにして多くの読者を得たのである。こうした自由教育の思想の結果として、大正十年（一九二一）に創立された「自由学園」をはじめとして、いくつかの「学園」が創られた。

これに比較すると、フランスではルソーの教育思想を原理として取り入れたと思われるフレネー運動は、子供に自由な表現活動をさせることによって、経験的な思考過程を重視しているが、全体として大きな力になっているとはいい難く、依然として主知主義的な教育が主流をなしている。

結論として大正時代から昭和初年にかけてのわが国では、ルソーは『告白』の作者であると同時に、『エミール』の作者として知られたのであったが、この二つの作品はどちらかといえば別々の領域で読まれ、影響を与えていて、文学と教育が総合的に理解されることはほとんどなかったといえる。

*

*

*

これまで見てきたように、ルソーの作品はひとつずつ個々別々に読まれ、理解されてきたが、軍国主義が強まるにつれて、それらはすべて「国体に合わない言説」として退けられた。実をいえばルソーの著作、とりわけその政治思想は、明治のはじめから一貫して、体制側からは否定され続けてきたのである。たとえば東京帝国大学文科大学教授の箕作元八は、西洋史の教科書のなかで、ルソーをつぎのように批判している。

「中にもルソーは空想に耽りて、極端なる自由平等論を唱へ、大いに人心を惑はせり」⁽⁹⁾（明治四四年）
また別の教科書にはつぎのような記述がある。

「その（ルソーの）所論空想に走り誤謬に陥れるところありと雖も、その文辞巧妙なりしがため一時大に行はれ、人心を迷はしめたること少なからず」⁽¹⁰⁾（大正五年）

教科書におけるこの種のルソー批判とその例については、別の機会に書いたので、ここではこれ以上触れないが、「わが国体と国風とに適せず」として退けられてきたのであった。しかし第二次大戦が終つて自由な言論が可能になると、ルソーは再び読まれ、研究されるようになった。そのなかでもっとも重要な研究は、桑原武夫を中心とする京都大学人文科学研究所が行なつた共同研究『ルソー研究』（一九五二）であつた。文学や思想を共同研究すること自体が珍しい試みであつたが、さまざまな専門の研究者が集まつて、ルソーという多面的な存在を全体的、総合的に研究し、討論したということは画期的なことであつた。ルソーがわが国に伝えられてから八十年余り、あれほど多くの人に読まれたのちに、その研究はようやく世界の水準に達したといえる。一例をあげるならば、当時フランスの研究者もほとんど言及していなかつた『言語起源論』についても、ここでは論文が書かれている。⁹⁵

もとより『ルソー研究』は研究論文集であるから、兆民のように名文を綴つて政治運動に誘つわけでもないし、藤村のように読む者に感動を与えようと意図するものでもない。しかしながら、ルソーが多くの読者を持つわが国では、どう読むかについての示唆をいまなお与える研究として、高く評価されるべきであると思う。

*

*

*

最後に、これはルソーの読解というよりは、ルソーに貼られたレッテルともいうべきものに、「自然にかえれ」がある。なぜならば、ルソーを読んだことのない人でも、高校の世界史で、ルソーは『自然にかえれ』といつた

と習っているからである。ところがルソーはその著作のなかで、一度も「自然にかえれ」とはいつていない。なぜこのようなことが起ったのであろうか。それについてはすでに書いたことがあるので、⁽¹⁾ここで詳しくは繰り返さないが、ごく簡単に述べておきたい。

- (1) ルソーは「自然にかえれ」といつていないのみならず、「自然にはかえれない」という趣旨のことを一度ならずいつており、「森へ行つて熊と暮らせ」というのは、彼の敵たちの恥すべき解釈だといっている。
- (2) フランスで出たルソーの研究書には、「自然にかえれ」はまったく出てこない。モンモランシーの国際研究学会でも、「自然にかえれ」ということばは、この件についての私の発表を除けば、一度も発せられなかった。

- (3) 日本の西洋史、世界史の教科書にはじめて「自然にかえれ」が出てくるのは、昭和八年である。それ以前前の教科書では「自然」の代わりに「野蛮的原始社会」、「原始の自然状態」、「原始的社会」となっていて、いまさらそんな状態に戻るはずがないのだから、ルソーの説は語謬で、大いに人心を惑わせり」ということになっている。

- (4) 結論として、「自然にかえれ」はヴォルテールをはじめとする反ルソーの立場を和らげて表現したのではないが。ルソーを好ましくない思想家とした明治、大正の教科書も基本的にその立場をとっている。いまの教科書はそれでよいのだろうか。

以上が私の論文の趣旨であるが、その後調べたところでは、英米の教科書にはルソーは return to nature または back to nature といったと書いてある例がいくつかある。またわが国でも、大正二年に出た三浦閑造の『エミ

ル』の翻訳につけられたルソーの伝記に、すでに「自然に帰れ」が見出だされる⁽¹²⁾。

*

*

*

以上きわめて概略的ではあるが、ルソーがどう読まれてきたかについて見てきた結論と反省として

(1) われわれの考えはしばしば一面的であるが、ルソーは多面的な人間である。ルソーの一面をとりあげて読んでも、なかなか面白いけれども、文明全体が問われる時には、やはり総合的な視野を持って読まなければ、ルソーを読みきれないのではないだろうか。

(2) 同時に、みずからの問題を持っている人が、直接テキストから汲みとった時に、もっとも面白い読解が出てくるように思われる。今後面白い読解が出てくることを期待したい。

注

- (1) E, Champion, J.-J. Rousseau et la Révolution française, 1909
- (2) R, Derathé, Le Rationalisme de J.-J. Rousseau, 1948
- R, Derathé, J.-J. Rousseau et la science politique de son temps, 1950
- D, Mornet, Rousseau, l'homme et l'oeuvre, 1950
- (3) 『明治文化全集』第三巻 政事編 p.13
- (4) 『明治文化全集』第五巻 雑誌編 p.67
- (5) 兆民には『学問芸術論』の翻訳はある。『非開化論』中江篤介訳 1883

- (6) 『明治文化全集』第二巻、自由民権編 p.358
- (7) 島崎藤村の『新片町より』に収められている。なお引用では旧漢字を現代漢字に直した。
- (8) 箕作元八『新定西洋史教科書』明治四四年 p.156
- (9) 新見吉治『統一中学歴史教科書、西洋史』大正五年 p.142
- (10) 鶴見俊輔、多田道太郎、樋口謹一「ルソーのコミュニケーション論」
- (11) 小林善彦「ルソーと『自然にかえれ』について」1986『フランスの知恵と発想』（白水社）所載
- (12) 『人生教育 エミール』三浦閑造訳 p.15

（フランス文学科 教授）

ルソーの読み方、読まれ方（小林）